

平成31年2月28日参議院政府開発援助等に関する特別委員会議事録

[○松沢成文君](#) 維新・希望の松沢成文と申します。

今日は、四人の参考人の先生方、お忙しい中ありがとうございました。

まず、稲場参考人にお伺いしたいんですけども、SDGsについて非常に分かりやすく説明していただいて、なるほどなと思う部分が多々ありました。その中で、キーワードとしていろいろ、食料とか貧困、格差、あるいは気候変動、災害とか紛争とか、こういうキーワード出てきまして、こういうものを乗り越えて持続可能な社会をつくらなければいけないということだと思んですけども、これ難しいですね。食料はそれこそ貧困にも格差にも関係しますし、全てがつながっているので、どれか一つ解決しようと思って政策打っても、それで解決できないところがこの問題の難しさだと思んですけども。

先ほど古賀理事さんからも質問ありましたけど、私は素人ですが、今日この話を聞いていて、この今挙げたキーワードのその背景にある最大の問題は、私は人口爆発じゃないかと思うんです。これをしっかりとコントロールできないと、食料も貧困も格差も、あるいは災害も紛争も解決できないというふうに思うんですよね。ただ、SDGsのこの説明の中で、人口政策、人口爆発をいかに抑えるかというところが、私は素人ですけど、弱いんじゃないかと思えてならないんです。

ただ、この人口問題というのは主権国家にしてみるとそれこそ国力の問題ですから、その国の経済力を富ますにも、軍事力のためにも、その国力のためには人口は必要なわけですよね。ですから、国際社会にあるべきあなたの国の人口モデルはこういうのがいいでしょうなと言われても、ふざけるなど、うちの国の人口政策はうちで決めるよと、それは主権国家の問題だとなって、非常に難しいところだというふうに思います。

ただ、やはりSDGsを本当に実現させるためには、この人口の問題を避けて通っていた

ら、私は、避けて通っていたらって、この人口の問題の取組が弱かったら私は全てが解決できないんじゃないかという問題意識を持っているんです。間違っていたら是非とも正していただきたいと思うんですが。

今、そこで、国連なんかで人口問題様々研究されていると思います。そういうところをもっと強化して、各国が受け入れるかどうかは分かりませんが、主権国家の立場がありますから。ただ、あなたの地域、あなたの国では、持続可能な社会をつくっていくにはこれぐらいの人口を、将来、三十年後、五十年後まで予測しながら政策を進めるのが一番妥当だと思いますよというようなやはり何かアドバイスを出す。それを受けてその国がどう反応するかを判断する。そして、例えば日本の援助はそこに焦点を当てようと、例えばバースコントロールや公衆衛生について、その地域で人口爆発が起きないようにするためにどういう援助ができるのか、そこにODAのプランが組めるのかと、私はこういう方向が是非とも必要ではないかというふうに今日話を聞いていて思ったんですが、いかがでしょうか。

○参考人（稲場雅紀君） どうもありがとうございます。

この人口問題に関しましては、先ほど若干御説明申しましたが、これ非常に難しい問題でございます。と申しますのも、やはりこの人口問題と貧困の問題というのはいわゆる卵と鶏の関係にございまして、貧困であるからこそ、子供を頼る形で子供をたくさん産んでしまうということがあるわけですね。なおかつ、いわゆる自分の人生どうなるか分からないというような文脈の中で、なおかつその子供というものに頼らなきゃいけないというような、そういった形で、社会保障がないこと、そして貧困がそのまま続いてどうなるか分からないこと、そういう中で人口増というものが起こっておるわけですね。

なおかつ、一つ、これは小沼先生もおっしゃっておったことかと思いますが、現状において人口爆発のフェーズに直面しているのは、どちらかというやはりサハラ以南アフリカということになります。例えば東南アジアであるとか東アジア、さらには例えばインドという

ような国々においても、いわゆる人口爆発フェーズが終わって、今後は逆に言うと人口ボーナスというか、ボーナスではない時代が来るということで、世の中、かなりそういう意味では、二十年、三十年たつ中で、いわゆる人口問題のこのディメンションというのが相当多様になってきているわけですね。

例えば、日本では高齢化、そして東南アジアではこれから二十年、三十年後に高齢化を迎えるのにどうするのか。アフリカでは人口爆発、二〇五〇年には世界の若者の半分はアフリカということになると。そういう中でどのようにこれを人口ボーナスにしていくのか。こういった議論が非常に、実際にはかなり、世界銀行であるとか、あるいは国連人口基金なんかでもなされてはおるわけなんですね。

やはりこの中で考えなきゃいけないのは、一つは貧困をなくす、そして、それぞれの人たちの人生というものがライフサイクルである程度見えるようにする、ここがないと結局みんな刹那的に子供を産んでしまうということがありますので、ここの部分をどうバランスを取るのか。

あともう一つは、やはり先ほどおっしゃられたように、一つは宗教の問題もこれは絡んでいるわけですね。例えば、避妊というのは絶対駄目だというような宗教や、あるいはそういうような形の政治的なイデオロギーみたいなものもあるわけでございます。そういうようなところに関して、いかに科学的な人口政策というものをしっかり各国が取れるようにしていくのか、政治のバイアスや思想、宗教のバイアスというものをどのようにある程度抑え込んでいけるかということが一つ大きな課題かなと。

ここについては、実は日本は相当優れた政策を持っていると思います。そういった意味合いにおいて、やはりこの人口政策において、人口と保健というようなところをしっかりと組み合わせ政策をリードしていくことが日本の非常に重要な立場かなというふうに思っているところなんです。

どうもありがとうございます。

○[松沢成文君](#) なかなか難しいですね。

次に、小沼参考人に伺いたいんですが、日本のODAの中でも非常に高く評価されている人的支援ですよ、技術供与とか。その主役を担っているのが青年海外協力隊であり、小沼委員もそこからこのキャリアをスタートさせたというお話がありました。

ただ、私も知事を務めていたときに、毎年二回、たしか春と秋ですかね、青年海外協力隊の皆さん、あるいはシニア協力隊の皆さんを激励して送り出して、また神奈川からのメッセージも伝えていただいたりしていたんですけども、そういう皆さんから聞くと、やっぱりなかなかこの決断が難しかったと。それは、海外協力隊に行っても、じゃ、帰ってきて日本で就職が見付かるのと。これが例えば企業に高く評価されて、このキャリアが、あなたは日本を代表して途上国に行って技術支援までしてきた、このすばらしい経験や志を我が会社は是非とも欲しいから、海外協力隊優先枠じゃないけれども、そうやって採ってくれるような企業が多ければ行きやすいんだけども、その保証が全くないのに、二年間行ってきて、帰ってきて職も見付からないというのじゃ困るといって反対もされたんですよという意見も聞いたんですね。でも、頑張っって決断して行ったと、こういう人たちもいるわけなんです。

今後、日本が誇る青年海外協力隊をもっともっと質の面でも量の面でも私は増やしていくことが日本にとっては重要だというふうに思っています。それはどういう方法があるのか、御経験の中からお聞かせいただきたいことと。

もう一つはセキュリティーですよ。これからやっぱり最貧国、途上国に行くと、テロがあつたり、あるいは、公衆衛生もひどいもので、もう病気になつたり、そういう怖さがあるわけです。そういうことに対する保障、もちろん保険には入って行くと思いますが、もっともっと充実させるということも必要かもしれません。その辺り、いかがお考えか、お聞かせいただきたいと思ひます。

○参考人（小沼廣幸君） ありがとうございます。

私も非常に協力隊の派遣人数が減っているということに対して危機感を持っておりまして、一つ思うのは、例えば、実際に仕事をしている人たちが協力隊に出るときに、休職して行ける人たちはまだいいんですけれども、退職して行かなければならない。そこで、自分のキャリアを放棄して、それで協力隊に行って帰ってきたらどうなるかという、そういうふうな危惧を持っている人たちはかなりいます。ですから、そういう意味合いにおいて、例えば、今実際にあります会社に対する補填制度、休職制度みたいなものをもっと充実していただいて、そういうものをもっと啓蒙していただいて、それで、協力隊事業に賛同してくれる、そういう、民間でも公的機関でもそうですけれども、そういった輪をどんどん広めていくことは非常に重要な一つだと思います。

それから、私が一つ思ったのは、協力隊の隊員になる資格そのものがちょっと、例えば社会経験二年ぐらいなきゃいけないとか、まだ厳しい部分があって、学生で卒業して協力隊にすぐに入りたいという学生、かなりいるんですよ。ただ、社会経験がないと入れないからというので、一旦勤める、勤めて二年ぐらい勤めるとまたそこで辞めてしまうというような、そういったジレンマがあります。ですから……

○委員長（松山政司君） 時間が参りましたので、おまとめください。

○参考人（小沼廣幸君） 済みません。

学生でも協力隊に行けるような、そういう制度があってもいいんじゃないかと私は思うんです。

それから、セキュリティーの件ですけれども、派遣される前にセキュリティーに関するそういう充実したオリエンテーションなり講義なり、そういうものをもっと充実させる余地はあると思います。

○松沢成文君 ありがとうございます。